

平成16年度(第48回)  
岩手県教育研究発表会発表資料

教 育 相 談

# 学校不適応児童の自己肯定感を高める 指導・援助に関する研究

—自分の得意なところを発展させる活動をとおして—

平成17年2月9日  
長期研修生  
所属校 西根町立大更小学校  
氏名 梅野展和

<目 次>

I	研究目的	1
II	研究仮説	1
III	研究の内容と方法	1
1	研究の内容	1
2	研究の方法	1
3	研究の対象	1
IV	研究結果の分析と考察	2
1	学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助についての基本構想	2
(1)	学校不適応児童の自己肯定感を高めることについての基本的な考え方	2
(2)	学校不適応児童の指導・援助に自分の得意なところを発展させる活動を取り入れる意義	2
(3)	自分の得意なところを発展させる活動の進め方	3
(4)	学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助についての基本構想図	6
(5)	検証計画の概要	7
2	学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助の実践	} ※別冊資料参照 (資料は当日配布)
3	実践結果の分析と考察	
4	学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助についてのまとめ	
V	研究のまとめと今後の課題	7
1	研究のまとめ	7
2	今後の課題	8

おわりに

【引用文献】

【参考文献】

## I 研究目的

学校不適応児童の指導・援助にあたっては、児童を受容的・共感的に受け止めながら、児童が自分の得意なところに目を向け、自分を肯定的にみることができるようさせることが重要である。

しかし、学校不適応を起こしている児童の中には、自分を必要以上に否定的にとらえている児童が見受けられる。これは失敗の経験や、周りからの自分に対する否定的な見方を表す言葉や行動により、苦手なところを大きくとらえがちになり、自分の得意なところに目が向かなくなっているためだと思われる。

このような状況を改善するためには、援助者との受容的・共感的な関係を基盤として、児童の得意なところを発展させることができる活動を積み重ねる中で、児童に達成感をもたせ、得意なところを大きくとらえさせることが必要である。

そこで、この研究は自分を否定的にとらえている児童が、得意なところを発展させる活動をとおして、自己肯定感を高める指導・援助の在り方について事例的に明らかにし、学校不適応児童の指導・援助に役立てようとするものである。

## II 研究仮説

学校不適応児童の指導・援助において、児童に得意なところをとらえさせ、発展させる活動を行えば、児童は自分の得意なところに目を向け、ありのままの自分を受け入れ、自己肯定感が高まるであろう。

## III 研究の内容と方法

### 1 研究の内容

- (1) 学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助についての基本構想の立案  
学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助についての基本的な考え方をまとめるとともに、基本構想を立案する。
- (2) 基本構想に基づく指導・援助の実践  
基本構想を基に、自己肯定感を高める指導・援助を実践する。
- (3) 実践結果の分析と考察  
実践結果について分析と考察を加えることにより、基本構想に基づく指導・援助の在り方を確かめる。
- (4) 学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助についてのまとめ  
実践結果の分析と考察を基に、学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助についてのまとめをする。

### 2 研究の方法

- (1) 文献法
- (2) 面接法
- (3) 観察法

### 3 研究の対象

平成16年度岩手県立総合教育センター教育相談室来談児童

#### IV 研究結果の分析と考察

##### 1 学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助についての基本構想

###### (1) 学校不適応児童の自己肯定感を高めることについての基本的な考え方

学校不適応児童の中には、自分を必要以上に否定的にとらえている児童が見受けられる。このような児童は、失敗の経験を重ねてきたことや、周りからの自分に対する否定的な見方を表す言葉や行動に接することが多いことがある。そのため、得意なところや苦手なところをもっているにもかかわらず、自分の得意なところに目が向けることができないで、自分でも苦手なところにばかり目が向くようになる。このように、苦手なところを大きくとらえがちになるために、自分を過度に否定的にとらえるようになっていないかと思われる。

このような児童は、援助者から受け入れられ、認められながら、得意なところや苦手なところをもっている自分に気付き、得意なところを大きくとらえることが必要である。自分の得意なところを大きくとらえることで自信を深めるとともに、得意なところに目を向け、自分に対する理解を深めることによって、自己肯定感が高まると考える。

自己肯定が高まるとは、自分の中の受け入れることができる部分だけではなく、受け入れがたい部分も含めて、ありのままに受け入れることができるようになることである。このことは、自分を大事に思う自尊感情が高まることにもつながる。自己肯定が高まった児童は、自分が人と比べて何かが優れている存在であるということではなく、人とは比べることができない存在であり、同じように他の人も比べることができない存在として受け入れることができるようになると思う。

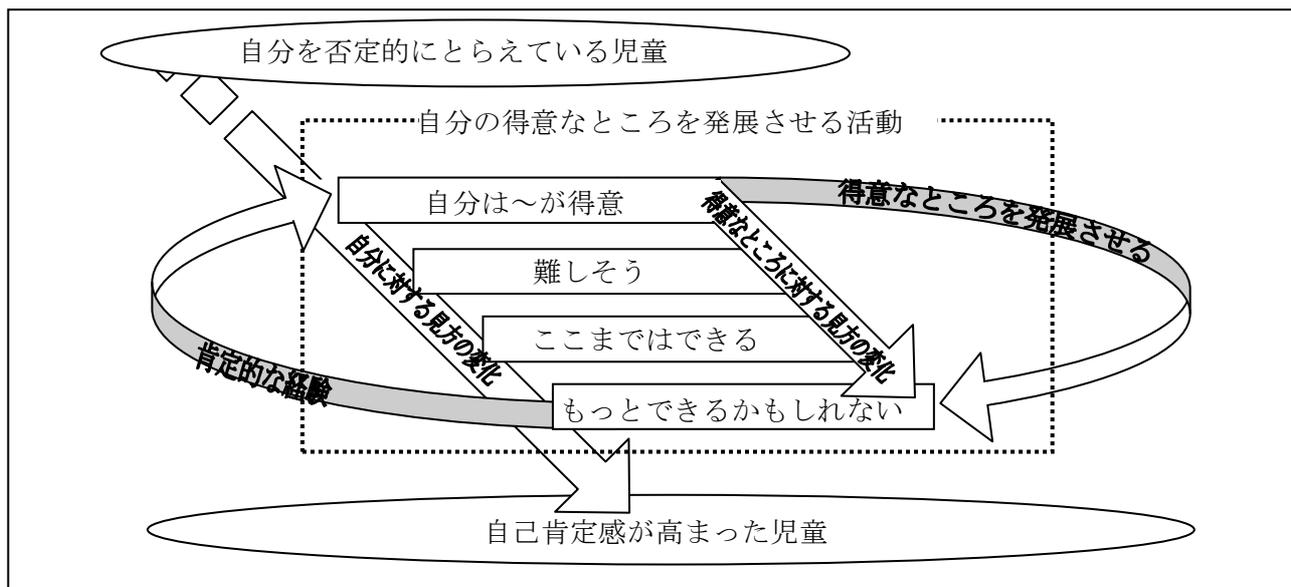
###### (2) 学校不適応児童の指導・援助に自分の得意なところを発展させる活動を取り入れる意義

自分を過度に否定的にとらえている児童が、肯定的に自分をみるようになるためには、援助者から受け入れられ、認められながら活動をする中で、達成感をもつとともに、得意なところを見つめ直し、得意なところや苦手なところをもっている自分に気付くことが必要である。

本研究でいう「得意なところ」とは、他者と比較して上手にできるとか、高い技術をもっているとかというより、自分が自分をどうみているかという自分に対する見方を表し、そのときの自分が得意だと思っているところである。小学校段階の児童は、感情志向的な「私は～が好きである」とか、あるいは、可能性予測・確信的な「私は～が得意である」とかというような文章記述で自分をとらえることが多いとされる。このことから、本研究のように可能性予測・確信的な「私は～が得意である」ということを手がかりに自分に対する見方についてはたらしきかけるのは、児童の発達段階に即していると思われる。また、児童の中には、「自分は～が得意である」とは意識していないことがある。そのような児童に対しては、「(自分は)できると思う」とか、「(自分は)好きだ」とかという言葉を手がかりに得意なところを見ていきたい。「得意なところ」という児童の自分に対する見方を手がかりに、児童の主体的な活動や気づきをとおして、改めて「得意なところ」に目を向けさせることで、自分に対する見方を見直し、得意なところや苦手なところを含めて、ありのままの自分として受け入れることができるようになると思う。

「自分の得意なところを発展させる活動」とは、児童が援助者とともに適度な困難さのある取組をとおして、自分の得意なところに対して理解を深め、得意なところを目に向け、自分の得意なところを多面的にとらえることができるようにさせる活動である。適度な困難さとは、手順の複雑さや大きさ、素材の種類といった新たな要素や、得意なところが生かされる新たな

経験が加わることである。このような適度な困難さのある取組は、児童に達成感を与え、満足感や成就感、自信につながる肯定的な経験となる。自分の得意なところを発展させる活動は、児童が、自分の得意なところをとらえ、目を向けるようにする活動を繰り返し行う。この活動では、一つの作品を制作する過程を一つの活動単位として、児童の自分に対する見方について繰り返しはたらきかけ、「自分はここまではできる」とか、「もっとできるかもしれない」とかという自分の得意なところに対して理解を深め、目を向けるようにする。このような活動の繰り返しによって、児童が得意だと思っていたことについてその思いを強くしたり、別の得意なところに新たに気付いたりして、自分を多面的にとらえることができるようになる。活動単位のイメージを【図1】に表す。



【図1】「自分の得意なところを発展させる活動」の一活動単位のイメージ

本研究では、児童の得意なところを発展させる活動を行う際に、特に制作活動を取り上げる。制作活動とは、自らの手や体を使って、制作の手順を計画し、材料を選択し、場合によっては計画を修正しながら材料を加工し、ものを作りあげる体験的な活動であるととらえる。この活動の中で、援助者は、児童の言葉や行動、表情、態度等に見られる得意なところに対する気持ちや思いを明らかにするようなかかわり方を行う。そこで明らかにされた気持ちや思いは、児童が自分から表したものである。援助者が、児童の表した気持ちや思いを明らかにすることで、児童は自分の得意なところを自然に受け止めることができる。児童の得意なところを生かした活動は、児童の活動に対する意欲を喚起し、その活動の主体は自分であると感じさせる。また、具体的なものを作ることで、自分の活動の成果を、時間をおいても思い出すことができ、自分が気付いた得意なところに対する思いをより確かなものにできると考える。

このように、自分の得意なところを発展させる活動をとおして、自分に対する見方を広げ、自分を多面的にとらえることは、自己肯定感を高めることに意義あるものとする。

(3) 自分の得意なところを発展させる活動の進め方

自分の得意なところを発展させる活動を次の段階で進めることとする。はじめの段階を活動の中で自分の得意なところを発揮し、得意なところに気付く「得意なところに気付く段階」、次の段階を自分の得意なところに対して気持ちや思いを表す「得意なところをとらえる段階」、そして、自分の得意なところを多面的にとらえ、ありのままの自分を受け入れる「得意なところに目を向ける段階」とする。

## ア 得意なところに気付く段階

この段階では、児童が自分の得意なところを発揮し、自分にできること、できそうだと思うことに気付くことができるようにしたい。

そのために、児童を受容的・共感的に受け止め、児童が安心して自分の思いを表したり、活動に取り組んだりできるような関係を築くようにする。援助者は、児童と共に制作活動に取り組む中で、児童の気持ちや思いを受容的・共感的に受け止め、意欲をもって取り組むことができるようにするのである。このことにより、児童は自分の得意なところを安心して発揮し、制作活動を楽しんだり、集中したりして取り組むことができるようになる。また、児童と援助者との信頼関係の中で、困難さのある取組に対して、児童は自分にできること、できそうだと思うことを言葉や行動で表現できるようになる。

このことは、次の二つの段階の指導・援助の基盤であり、児童に対して肯定的な見方をすることにより、児童は自由に気持ちを表したり、行動したりすることができる。

## イ 得意なところをとらえる段階

この段階では、自分の得意なところに対して気持ちや思いを表し、理解を深めることができるようにしたい。

そのために、児童の言葉や行動をとおして表れた得意なところに対する気づきを、援助者の言葉で補ったり、言い換えたりすることで明らかにする。児童は主体的な活動の中で、様々な気持ちや思いをもち、それを言葉や行動に表す。それらの言葉や行動は、断片的なものであったり、自分でも説明のつかない情緒的なものであったりする。援助者は、その中で得意なところに対する気持ちや思いについて児童の活動の結果と結びつけて言葉で補い、児童に自分の気づきをもう一度とらえさせるようにするのである。このことにより、児童は自分の気持ちや思いを自分の得意なところと関連付けてとらえることができるようになると思われる。

## ウ 得意なところに目を向ける段階

この段階では、自分に対する見方の変化に気づき、ありのままの自分を受け入れることができるようにしたい。

そのために、一つめは、活動の中で児童が気付いた得意なところを振り返り、得意なところに対する気持ちや思いの変化に目を向けさせるようにする。ここでは、活動の中で明らかにされた得意なところに対する気づきを活動の後でもう一度振り返る。適度な困難さのある制作活動により、いままで児童がとらえていた得意なところに対する気持ちや思いは、より確かになったり、明らかになったり、新たになったりすると思われる。このような児童がとらえた得意なところに対する気持ちや思いの変化を確かめ、自分の得意なところを多面的にとらえることができるようにする。

二つめは、この活動をとおして自分に対する見方の変化に目を向けさせるようにする。自分の得意なところを発展させる活動を何度か繰り返す中で、得意なところを多面的にとらえることができるようになった児童は、いままでの自分に対する見方とは異なる見方を行うようになると思われる。

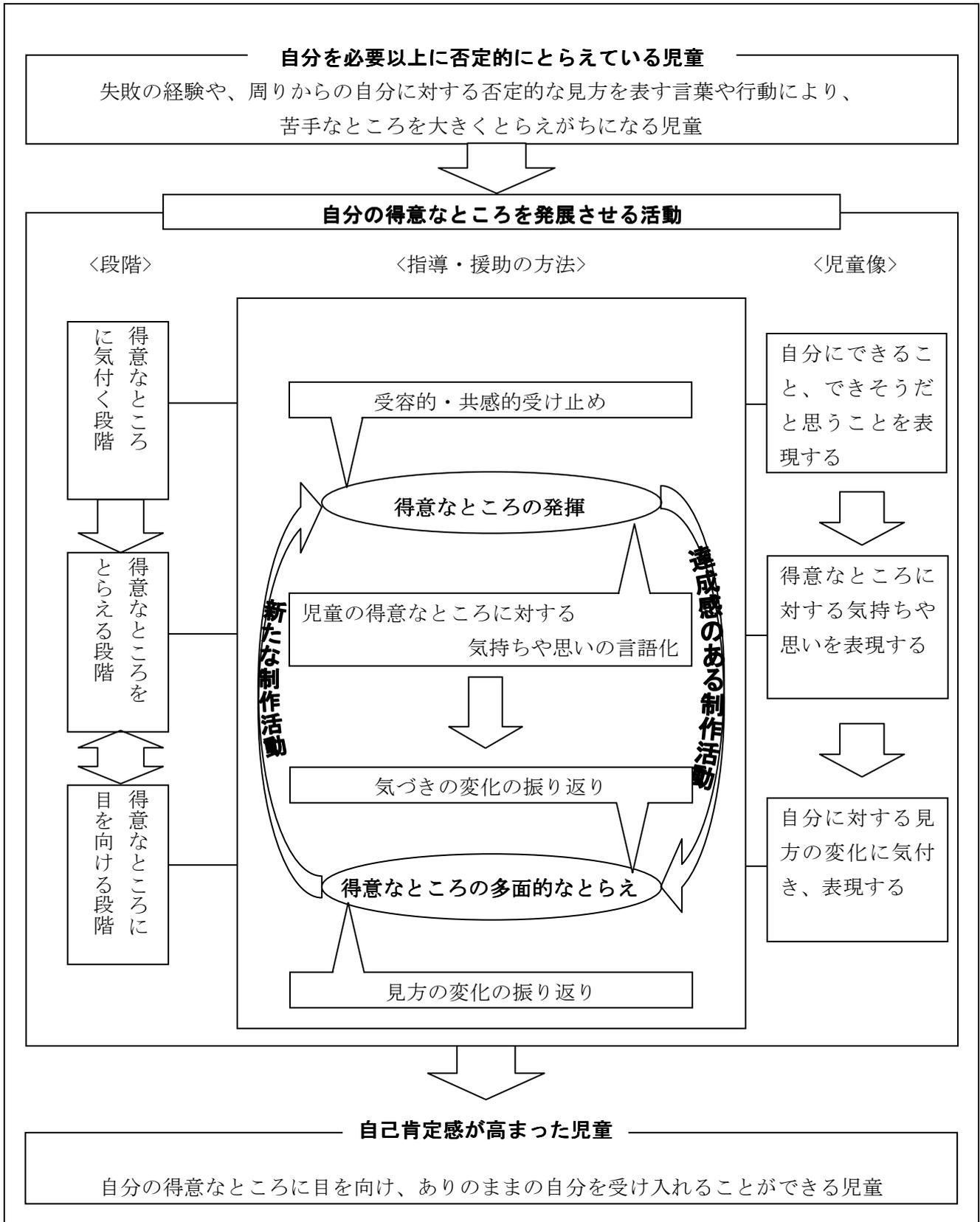
このように、児童の主体的な活動の中で得意なところに気付く段階と、得意なところをとらえる段階、取組の過程や結果を振り返って、自分に対する見方の変化を確かめる、得意なところに目を向ける段階を設定する。気付く段階で信頼関係が構築された上で、とらえる段階と目を向ける段階の二つの段階を繰り返すことで、児童の自分に対する見方にはたらきかけ、自己肯定感を高めることができると考える。自分の得意なところを発展させる活動の各段階のねらいと指導・援助の手だては、【表1】のように考える。

【表1】自分の得意なところを発展させる活動の各段階のねらいと指導・援助の手だて

段階	活動のねらいと指導・援助の手だて	留意点
気付き段階 得意なところ	<p>1 自分の得意なところを発揮し、自分にできること、できそうだと思うことに気付かせる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童が得意だと思っていることについて、あるいは、興味や関心のあることについて取り組む中で、活動に意欲をもつことができるように、児童を受容的・共感的に受け止める</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童が得意だと思っていること、興味や関心のあることを生かすことができるような制作活動を提示する</li> <li>・適度な困難さのある取組を楽しみながらできるようにする</li> </ul>
とらえる段階 得意なところ	<p>2 自分の得意なところに対する気持ちや思いを言葉や行動で表現し、理解を深めさせる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉で補ったり、言い換えたりして、制作活動の中で表れた得意なところに対する児童の気づきを明らかにする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受容的・共感的な関係の中で児童に自由に話させる</li> <li>・制作活動の中の非言語的な表現にも留意し、言葉で補うようにする</li> <li>・児童の得意なところに対する気づきを制作活動の結果と結びつける</li> </ul>
目を向ける段階 得意なところ	<p>3 気持ちや思いを振り返り、ありのままの自分を受け入れさせる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・制作活動の中で児童が気付いた得意なところを振り返り、気持ちや思いの変化に目を向けさせる</li> <li>・児童の自分に対する見方の変化に目を向けさせる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・制作活動の中で明らかにされた得意なところを振り返り、以前の見方と比べ、多面的にとらえることができるようにする</li> <li>・制作活動をとおして気付いた気持ちや思いを振り返り、児童の自分に対する見方の変化を認めるようにする</li> </ul>

(4) 学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助についての基本構想図

基本的な考え方に基づいて、学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助についての基本構想図を【図2】のようにまとめた。



【図2】 学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助についての基本構想図

(5) 検証計画の概要

基本構想に基づき、各段階の指導・援助についての有効性を【表2】のような分析の観点と内容で検証する。

【表2】各段階の分析の観点と内容

段 階	分 析 の 観 点	分 析 の 内 容
得意なところに気付く段階	1 自分の得意なところを発揮することができたか 2 自分の得意なところに気付くことができたか	・得意だと思っていること、興味や関心のあることに援助者とともに、楽しみながら取り組む ・自分にできること、できそうだと思うことを言葉や行動で表現する
得意なところをとらえる段階	3 自分の得意なところに対して気持ちや思いを表現することができたか	・自分の得意なところに対する気持ちや思いを言葉や行動で表現する
得意なところに目を向ける段階	4 得意なところに目を向け、変化に気付くことができたか 5 否定的にとらえていた自分を肯定的にとらえることができたか	・得意なところに対する気持ちや思いの変化を言葉や行動で表現する ・自分についての見方の変化について肯定的な言葉や行動で表現する

2 学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助の実践 ※別冊資料参照

3 実践結果の分析と考察 ※別冊資料参照

4 学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助についてのまとめ ※別冊資料参照

「注」個人情報保護のため事例にかかわる資料は当日配布いたします

## V 研究のまとめと今後の課題

### 1 研究のまとめ

この研究は、自分を否定的にとらえている児童が、自分の得意なところを發展させる活動をとおして、自己肯定感を高める指導・援助の在り方について事例的に明らかにし、学校不適応児童の指導・援助に役立てようとするものであった。その結果、仮説の妥当性が確かめられ、成果として次のことが得られた。

(1) 学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助についての基本構想の立案

学校不適応児童の自己肯定感を高めることについての基本的な考え方や自分の得意なところを發展させる活動を取り入れる意義、進め方を明らかにし、基本構想としてまとめることができた。

(2) 基本構想に基づく指導・援助の実践

基本構想に基づき、対象児童に対して実践を行ったことにより、自分の得意なところを發展させる活動を取り入れた指導・援助の手だてが、学校不適応児童の自己肯定感を高める上で効果があることが分かった。

(3) 実践結果の分析と考察

指導・援助の実践の分析と考察により、活動が積み重なるにつれて、各段階の実践で対象児童の変容が見られた。また、対象児童の自己肯定感が高まってきたことが認められ、手だての有効性を見ることができた。

- (4) 学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助についてのまとめ  
学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助について、対象児童の実践から成果と課題を明らかにすることができた。

## 2 今後の課題

- (1) 学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助について、他の事例でも実践を積み重ね、基本構想に基づいた指導・援助の有効性を確かめていく必要がある。
- (2) 学校不適応児童の自己肯定感を高める指導・援助について、児童に応じた自分の得意なところを発展させる活動を明らかにする必要がある。

## おわりに

長期研修の機会を与えてくださいました関係機関の各位並びに所属校の諸先生方に心から感謝申し上げます、結びの言葉といたします。

## 【引用文献】

安藤清志・押見輝男編(1998),『対人行動学研究シリーズ6 自己の社会心理』,誠信書房

## 【参考文献】

梶田叡一(1985),『子どもの自己概念と教育』,東京大学出版

梶田叡一編(2002),『自己意識研究の現在』,ナカニシヤ出版